

ブラジル流、 サッカーW杯の楽しみ方

矢崎 久美

二〇一四年六月、サッカー王国ブラジルで、六四年ぶりにW杯が開催された。地下鉄のストヤデモ、強盗の増加など、W杯前に日本で耳に入るのは、物騒なニュースばかり。周囲からは、ブラジル訪問を心配されたのだが、五年ぶりに訪れたサンパウロは、時間の流れが緩やかで、人々の優しさ、陽気さも昔のまま。店構えも壁の落書きも、ガタガタの歩道も以前と変わらず、その雑然とした街の風景に懐かしさを覚えた。ただし、物価は予想以上に上昇しており、消費意欲が半減してしまつたのも事実である。外国人からみても、抗議デモやむなしと思えるほど、物価上昇は深刻であることがうかがえた。

サンパウロ到着時、すでにW杯は始まっていたのだが、正直、さほど盛り上がっている印象は受けなかった。ブラジル人というのは、

何をすることもスロースタートという傾向がある。もちろん個人差や地域差はあるのだが、せっかちな日本人と比較するとかなりスロウだ。話題になったスタジアム建設の遅れだけでなく、ライブ開始の遅延、スーパールのレジ待ち等々、あらゆる場面で待つことを強いられる。厳格な日本人にとって、最初は苦行なのだが、郷に入れば：で、慣れるとさほど気にならなくなる。待てばいつかは順番が来るし、サッカーの試合やライブもいつのまにかエンジン全開になり、遅れたことなど忘れるほどの盛り上がりを見せる。多少の遅れはこ愛嬌、というお国柄なのだ。

そんなスローなブラジル人ではあるが、W杯前から人気だったのが、「フィグリンニャ」と呼ばれるW杯出場選手のシール集めである。出場国の情報が載ったアルバムに、選手のシールを集めて貼つ

ていく遊びなのだが、一部の収集家だけでなく、サッカーに興味のないお年寄りや女性までが、フィグリンニャ集めに夢中になる。パシカと呼ばれる新聞スタンドで、一袋五枚セット、一リアル（約五〇円）で売られていて、中身は開けてみるまでわからない。同じシールがダブったら、今度は学校や職場、ときには道端で交換会が始まる。これは四年に一度のW杯恒例の遊びとして定着している。

すでにご存知の方も多いと思うが、ブラジル代表戦のある時間は学校も仕事も、あらゆるものがストップする。幹線道路は、ブラジルの試合を家族や友人たちと観戦するため、家路を急ぐ車で大渋滞となる。さらに、そのドライバーたちを狙って、応援グッズの売り子たちが、あちこちの交差点に出没する。町行く人々は、黄色のブラジルTシャツを着込み、国を挙げたお祭りにむけて、ソワソワし始める。試合が始まると、普段はおしゃべり好きなブラジル人も雑談をやめ、画面を食い入るようにみつめる。そしていざ、ブラジル代表がゴールを決めると、あちこちの家やバーから、けたたましい鳴り物と花火のオンパレード。天

地がひっくり返りそうな騒音で、試合の解説者の「ゴール！」の雄叫びもかき消されてしまうほどだ。無事にブラジル勝利で試合が終わると、町の雑貨屋では、次の対戦に向けたブラジル応援グッズが倍増し、店先が黄色と緑に染まる。鳴り物類を中心に、チープなものからお宝ものまで、町中にブラジルグッズがあふれるのだ。

残念ながら、自国開催での優勝、という夢を実現できなかったブラジルだが、多くの国民は、意気消沈しながらもブラジル代表の脆さを受け入れる冷静さも持ち合わせている。WEBサイトには自虐ネタがあふれ、ブラジルの欠点を笑い飛ばすギャグも見受けられた。

二年後にはリオ五輪も控えている。世界的イベントに向け、止まらぬ物価上昇や格差等の問題を抱えながら、ブラジルは今後どのような道を選択していくのか。心配性日本人から見ると気が気でないのだが、そんな問題を陽気に笑い飛ばせるポジティブさが、ブラジル人の最大の魅力である。

（やざき くみ/JETROビジネス情報サービス部ビジネス情報サービス課、元JICA日系社会ボランティア）